

中濃農林事務所の普及活動状況 令和4年8月25日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■指導農業士 中濃ブロック合同研修

8月4日の午前、関市大杉の(株)ふる里農園美の関において、中濃ブロック指導農業士合同研修会が開催された。この取り組みは可茂、郡上、武儀の3地区指導農業士会が合同で年1回開催する行事で、今年には武儀地区指導農業士会が当番となった。

武儀地区指導農業士会では、事前に他地区の指導農業士会と連絡を取りつつ、今年の研修会を企画し準備してきた。当日は水田農業におけるドローン利用を中心としたスマート農業の研修と、ぶどう「シャインマスカット」の根圏制御栽培の現地視察を含む(株)ふる里農園美の関の農業経営の概要について研修を行った。雨の中での研修となったが、関係者を含め19人の出席があり、中濃農林事務所は武儀地区指導農業士会の企画、準備、実施について支援を行った。



【農業革新支援専門員の指導】

(農業普及課)

■農業大学校 夏秋なす視察

8月5日、農業大学校1年生3名の夏秋なす現地調査に対応した。

中濃夏秋茄子生産組合およびJAめぐみのに協力いただき、JAめぐみの下有知なす選果場および生産者2名のは場を視察し、夏秋なす栽培方法や生産組合の概要、流通の現状などを説明した。

3S栽培ほ場では、導入当初はマニュアル通りではうまくいかず、様々な工夫や試行錯誤を繰り返しながら、現在の栽培方法にたどり着いたことや、土耕栽培では、切り戻し剪定を実演していただき、基本的な管理を徹底することなど、生産者目線で丁寧に説明いただき、学生も熱心にメモを取っていた。

農業普及課では、農業大学校の活動を支援し、将来の担い手確保につなげていく。(地域支援係)



【ほ場視察】

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■有機農業 現地意見交換

岐阜県では、国の「みどりの食料システム戦略」を基に有機農業の取り組みを進めている。中濃農林事務所管内でも今年度、中濃地区有機農業推進プロジェクトチームが組織され、有機農業の実態調査を行っている。

今回、県農産園芸課が発案した「有機農業プロジェクトチーム現地意見交換」について、中濃地区有機農業推進プロジェクトチームとして日程調整、準備を行い、8月16日の午後に開催した。水稻(コシヒカリ、ハツシモ岐阜SL)で有機JAS認証を取得した関市の農業法人を含む11人が参加し、認証ほ場を視察した。その後、関市武儀事務所でも意見交換を行い、法人のこれまでの取り組み経過、生産販売状況、



【有機JASコシヒカリ水田視察】

課題、今後の計画について
(農業普及課)

■水稲（採種） ほ場審査

水稲採種ほ場のほ場審査が始まり、農業経営課、可茂農林事務所等からも種子審査員を派遣いただき、JAめぐみの、全農岐阜、岐阜県米麦改良協会、美濃市等関係機関の協力を得ながら実施している。

8月4日は「あきさかり」、12日は「ほしじるし」、18日は「ほしじるし」「モチミノリ」の出穂期審査を、25日は「あきさかり」の糊熟期審査を行い、審査基準に基づき、異品種混入やストライプ株、病虫害や雑草の発生状況を審査した。一部ほ場で雑草の発生がみられたが、ほとんどのほ場は生育の揃いもよく、よく管理されていることが伺えた。

農業普及課では、ほ場審査を適切に実施し、水稲優良種子の確保につなげていく。（地域支援係）



【審査ほ場】

■水稲 斑点米カメムシ類注意喚起

水稲の斑点米や不稔を引き起こすカメムシ類の発生が県内で多いことから、7月29日付けで斑点米カメムシ類（カスミカメムシ類、イネカメムシなど）病虫害発生予察注意報が発令された。近年、中濃管内の一部地域で発生が多いイネカメムシは、水稲出穂後の籾の基部を吸汁することにより、玄米肥大が初期段階で停止し、水稲不稔の原因の一つとなっている。

農業普及課では、早生品種「コシヒカリ」の水田で調査を行い、イネカメムシ幼虫を確認している。今後、「ハツシモ岐阜SL」等中生～晩生品種が被害を受けないよう注意喚起を行い、適期防除を周知していく。（地域支援係）



【捕獲したイネカメムシ幼虫】

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■いちご 硝酸態窒素濃度の測定による生産安定

中濃いちご生産組合ではポット苗による育苗が行われている。9月には本圃への定植が始まるが、いちごでは安定した収穫を行うため、花芽の分化した苗の定植が必要となる。

花芽分化を促すため、8月後半より窒素中断を行い一時的に硝酸態窒素濃度を下げるが、そのためには定期的な測定による硝酸態窒素濃度の確認が必要となる。

農業普及課では、8月上旬より新規就農者を含む希望者を対象に定期的な硝酸態窒素濃度の測定を行い、窒素中断の確認を行うとともに、病害対策等の指導を行い、生産者の安定生産を支援している。

（地域支援係）



【栽培状況を確認】

■さつまいも 施肥試験圃場の生育調査

JAめぐみのさつまいも生産組合では、他産地に比べ単収が低く、つるボケを懸念して施肥を控える生産者が多いことも一因と考えられる。昨年度、施肥試験を実施し、地力窒素が低いほ場では施肥量を増やすことで収量の増加が見られた。今年度は継続試験として、土壌診断で地力窒素が低かった圃場において、肥料や土壌改良材の施用の収量等への影響について調査を行っている。

8月18日に試験圃場において生育調査を実施した。無処理区、肥料施用区、肥料＋土壌改良材施用区に分けて、蔓長、茎太、葉色等の測定を行った。目視でも生育の違いが明らかであり、肥料＋土壌改良材施用区が最も生育が良かった。

農業普及課では、今後収穫期の調査を行い、収量や品質に関する評価を行っていく。

（地域支援係）



【施肥試験圃場】